

ガブリエル・フォーレ（1845-1924）の《レクイエム》

——20 世紀日本における受容

栗山有沙 愛知県立芸術大学音楽学部作曲専攻（音楽学コース）

要旨

ガブリエル・フォーレ Gabriel Urbain Fauré(1845-1924) の《レクイエム Requiem》Op. 48 は、1888 年に建築家の葬儀に際してマドレーヌ寺院で初演された。その後も作曲者自身の手によって何度も書き直され、最終的にそれぞれの初演の年をとって 1888 年版、1893 年版、1900 年版と呼ばれる 3 つの版ができた。特に 1900 年版はパリ万博で初演されたときのものであり、この万博でフォーレの《レクイエム》は称賛を得た。この作品は、ロマン派の作曲家たちが力を入れて作曲した〈ディエス・イレ〉が省略されている点や、至る所でテキストの改変が見られるという点で革新的なレクイエムであったために注目されることとなった。現在この《レクイエム》は、3 つの版に関する研究やフォーレの死生観に関する研究が盛んに行われている。一方で、この作品の日本における受容という面はあまり触れられてこなかった。

本論文は、フォーレの《レクイエム》の日本における受容を明らかにし、なぜこの作品が日本でも人気を獲得することができたのかを考察することを目的とした。

論文全体は 3 章から構成される。

第 1 章「フォーレの《レクイエム》について」では、フォーレの《レクイエム》の基本情報についてまとめた。フォーレは古典宗教音楽学校で教育を受けて育った作曲家で、卒業後は教会オルガニストとしての活動を長く行なった。このように宗教音楽とも関わりの深かった作曲家であるにも関わらず、彼は 1888 年の初演で当時としては革新的な《レクイエム》を発表した。最後の審判を描いた〈ディエス・イレ〉が省略され、赦祷式での楽曲が追加されるなど、楽曲構成における革新的な部分はこの作品の穏やかな性格へとつながった。

第 2 章「明治から昭和初期の日本における洋楽受容」では、フォーレの《レクイエム》が日本で演奏され始めたと思われる 1930 年代までの、日本におけ

る洋楽受容に関してまとめた。日本におけるフランス音楽の受容は、明治のはじめ頃に陸軍軍楽隊や鹿鳴館を通して始まった。その後に起こったワグナー・ブームによってオペラ・ブームが引き起こされ、フランス・オペラの楽曲が聴かれるようになった。その流れの中で明治末期にはドビュッシーの音楽に注目が集まり、同時代のフランス音楽が聴かれることとなった。第一次世界大戦後には来日するフランス人演奏家によってフランス音楽がさらに広められることとなった。実際フォーレの音楽が日本で取り上げられるようになったのは1910年代であったが、大正時代にはあまり注目を得ていないようであった。しかし、外来演奏家や留学経験のある演奏家による演奏や、レコード発売に伴う雑誌での特集によって、1930年代には多くの人に認知されるようになっていった。

第3章「フォーレの《レクイエム》受容」では、フォーレの《レクイエム》に関して日本でどのような受容が行われていたのかを明らかにした。第1節「日本における《レクイエム》の演奏」では、日本初演と思われる1936年の演奏会から、1953年までの6つの演奏会を取り上げた。《レクイエム》のレコードの日本での販売が演奏のきっかけとなったことや、演奏技術が未熟でありながらも演奏されたことなどが分かった。第2節「《レクイエム》の録音物」では、1952年から2000年の《レクイエム》の録音物の販売枚数をもとにした分析と、1935年から1960年のレコード雑誌に掲載された《レクイエム》に関する記事の分析を行なった。録音物はLPレコードからCDに移行する時期に枚数を伸ばしていることが分かった。また、1888年版や1893年版のCDも1987年頃から発売されており、この作品に対する日本人の積極的な態度がうかがえた。雑誌記事の分析からは、フォーレの《レクイエム》が高く評価されており、記事が書かれた当時からこの作品は日本で親しみを持って受け入れられていたことが分かった。

フォーレの《レクイエム》は、穏やかで美しいという楽曲自体の魅力に加え、演奏の難易度や楽器編成、演奏時間という点での演奏のしやすさ、レコード販売などの文化・技術の水準の高まりといったことを理由に、日本で人気曲となることができたといえよう。